

へ消えていくであろう。一下士官に過ぎなかった私には、すべてを正確に語れるほど詳しくはない。しかし、今のうちなら残留体験者もまだ大勢健在のはず。体験者には「語りつぐ」義務があると思う。生きているうちにみんなで協力したいものだ。

人類は平和でなければならない。いや、すべての生物が平和共存のための良きリーダーであるべきだ。そのための「生き証人」として、私たち『大正生まれ』を中心とする世代は、日本歴史始まって以来の動乱期を生きぬいてきた、唯一の存在であることを自覚すべきであろう。入隊するまで『極右思想』に共鳴していた私は、山西に残留し、中国内戦に参加したことによって『戦争』とは何かを、もう一度初めから考え直すようになった。

戦場で、青春を無惨に散らせた敵味方を思う今、日夜この手に数珠をはめている。

世界の本当の平和が到来することを、ひたすら希って。

## 二度の傷病をのりこえて

滋賀県 奥野豊蔵

まず私の家族構成から書き始める。現在は六人家族で、当時は妻と子の三人家族だった。

昭和十九年三月二十九日、三十六歳の私は第一補充兵役で中部第四十六部隊（姫路）に応召を受けて第二中隊に編入、植田隊小笠原班で教育召集が始まった。

四月六日夜分には行先不明の貨物列車で姫路を出発して下関、博多を経て釜山から朝鮮平壤に到着し、ひろびろとした小高い丘で毎日訓練があった。

そして六月のある日、日射しの強い暑い中を軽機関銃を操作して坂を登ったり降りたりするうち、めまいが起こり戦友に助けられて療養所に運ばれ療養した。その時、夢のような召集解除の命令があり、陸軍二等兵に進級した。七月五日に平壤をあとに釜山から博多港に上陸して懐かしいわが家に帰ってきた。

続いて同年八月二十五日、臨時召集令を受領し、再度

の召集で三十一日に中部第四十七部隊（鳥取）に入隊した。そして九月十四日北支派遣軍が編成され、驚第三九一二部隊に編入された。さらに三日後に鳥取から北支那の洛陽へと出発した。第一百師団長木村経廣閣下、第六百六十三連隊長上阪勝大佐の下に編入された。第一大隊長稲垣毅治少佐、第二小隊長吉川四郎少尉、分隊長光沢義一伍長であった。

その後十月一日からは白草波で一〇日間演習および検閲を受けた。十一月十三日からは陳凸嶺に一個小隊が八路軍の討伐に服務した。ここで初めて実戦に出遭った。敵は小高い木立ちの間からパンパンと攻めるので応戦した。ピュンピュンと頭や顔の間を弾丸が飛んで全く生き残る心地はなく、戦争の恐ろしさ、人間の殺し合いの恐ろしさを味わった。

無我夢中で前進するうち、いつしか我が軍は山の頂きに上り、敵は反対に下から撃ってきた。狙い撃つても当たらないのに、運悪く戦友の一人が腹部に貫通銃創を受け手当てでもできず即死。戸板に乗せて原隊に運び、直ち

にその夜火葬。

十一月に独立野砲第九中隊に転属、驚第三九〇六部隊佐賀隊に編入になり、十二月には陸軍一等兵に進級した。寒気と食糧難と疲労で六一キの体重が四九キになり凍傷にかかり洛陽野戦病院に入院、さらに新郷兵站病院に護送され右足第五指根節を切開、切断手術を受けた。二月にはいって北京第一陸軍病院に移ったが、その途中、北京に向かう列車が敵機の空襲にあった。他の兵士たちは下車避難したが、私は歩けないため列車の片隅にしゃがみこんでいたところ、大野伍長が近寄り、お前とともにいるぞと言って力づけて頂いたことは、忘れられない思い出である。

北京病院では太陽燈照射治療を受け七月に退院して洛陽基地に帰り、洛陽城の警備についた。そして八月十五日に停戦命令になり洛陽城を中国側に引き渡し、十月に武装解除されたので佐賀砲兵隊跡にて捕虜生活を送った。その後戦闘もなく短い期間で昭和二十一年三月に引揚命令を拝受して鄭州、南京を経て上海に集結。暫くの間滞在して、上海港にて乗船。検疫、携帯品の検査等があり、

四月三日博多港に入港、米軍の検疫その他検査完了後、上陸した。

解散式で指揮官の訓辞があり、特別列車で夜中の午前二時に草津駅に着いて我が家に帰った。何の連絡もなく帰ったので家族一同はびっくりした。しかし何よりも無事であって安堵していた。